

要旨

『日本洞上聯燈録』における病の諸相

駒澤大学 岩永正晴

「『日本洞上聯燈録』における病の諸相」と題して行う今回の発表は以下の作業の結果を報告するものである。

【目的】

嶺南秀恕（1675-1752）撰『日本洞上聯燈録』における祖師達をめぐる病に関する記述から、病に対する撰者嶺南の認識を明らかにする。

【対象】

『日本洞上聯燈録』12巻（以下、『聯燈録』と略称）を対象とする。

『聯燈録』の解題、すなわち著者嶺南秀恕の伝、成立・刊行・絶板の事情等については、近世洞門研究会（晴山俊英、塚田博、井上亜菜子、駒ヶ嶺法子、岩永正晴）による共同研究の成果である「『日本洞上聯燈録』の研究（一）」（『駒澤大學禪研究所年報』第15号、2003年12月）を参照されたい。

『聯燈録』は742名の伝を収める。その多くは永平下の祖師であるが、曹洞宗宏智派の祖師11名（渡来僧およびその嗣承を承ける祖師）、居士4名の他、住吉明神や道正菴主等の伝も含む。以上の742名の伝のうちに見られる病に関する記述を対象とする。

【方法】

『聯燈録』における病に関する記述を取り上げると私見では135例を見いだすことができた。よってこれらを分類整理し、その記述を含む伝が先行する史書にも含まれている場合、それと比較するという作業を行った。

【結果】

『聯燈録』における病の記述を整理すると以下ようになる。

- 1) 祖師の遷化に至る過程としての病に触れるもの、104例
 - ・祖師本人が病を得て遷化したとするもの、72例
 - ・祖師本人が病無くして遷化したとするもの、22例
 - ・祖師の師が病を得て遷化したとするもの、6例
- 2) 病を邪見等の譬喩とするもの、12例
- 3) 病を理由に朝廷や将軍等権力者の招請を断ったもの、8例
- 4) 病を理由に寺院を退堂したというもの、5例
- 5) 徳により疫病等を押さえ込んだもの、3例
- 6) その他、3例

『聯燈録』における病の描写をまとめると、嶺南秀恕の以下のような認識があったことを察することができよう。

《祖師の病》

祖師自身（あるいはその師）の病は遷化に至る過程として本人に淡淡と受け止められた。病状や闘病の様子は記述されない。他の史書では病状の描写があっても『聯燈録』では「示疾」のみ表現された場合もある。

また祖師の病は寺院からの退堂や権力者の招請を断る理由として用いられた場合もある。

《他者の病》

疫病等、他者に禍をなす病は祖師の徳によって降伏されることもある。

キーワード：嶺南秀恕、『日本洞上聯燈録』、病